

CLANNAD～
AnotherEpisode～

々々

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある意味不良高校生伏見青葉の日常。

目次

桜の見える窓から	1
彼との関係	19
僕と君と貴女とそして……	39

桜の見える窓から

——この学校は好きですか？

4月。

僕が通う光坂高校への桜が咲き誇る坂道の途中、道で立ち止まっている女性がそんなことを言っていた。僕は気にも止めず足を進める。

しかし、一緒に通学していた友人の岡崎は彼女に視線を向け、足を止めていた。結構ギリギリな時間のため、ここで止まっていたら遅刻するのは避けられない。

「おい岡崎！ つてだめだこりゃ。聞こえちやいねえ」

体を揺すり、目の前で手を動かしても岡崎の視線は奪われたまま。優しい親友なら岡崎が元に戻るまで待つてあげるのだろう。僕はそんなことはないので、岡崎を置いて一人で再び坂道を登り始める。

別に遅刻しても良いんだけどさ。ただ何となく僕はこの場にいるべきではないと思つた。



2年生の教室はとても賑やかだ。1年生は緊張と不安で教室内のあちこちで話している光景を見るのに数カ月はかかる。そして3年生は受験を考えている人を中心に空気がピリピリしてあるため、クラス全体が賑やかであることは少ない。

そんな何処まで賑やかになれるのか分からない華の高校2年生も、僕が教室に入ると一瞬だけ静かになる。気にしないで話を続けなければならないのに、なんて思いながら席に向かい鞆を下ろす。

席は教室の左下隅。岡崎と同じ場所、いわゆる主人公席と呼ばれる場所だ。隣の人も岡崎と同じで春原みたいなのだ。面白いのだが、そこまで旨い話はない。窓を開けてぼんやり空を眺める。僅かな風が教室に入って前髪を揺らす。

遅刻ギリギリだったこともあって、すぐに担任がやって来て朝のHRを始める。その時間は短く、必要なことを行つてすぐに教室から出ていく。それぞれはまた会話に戻つたり、一限目の準備をしている。

僕は後者を見習つて鞆を机の上に乗せ、一限目に使う教科書を探して取り出す。

これにかかる時間はほんの少しで、教師が来るまで暇になる。適当に教科書をパラパラ捲る。その時間は内容を知っていながらも、授業を受けなければならぬことを痛感する時間であつてとても嫌いだ。

書かれていることを流し見していると、気が付けば教科書の半分まで捲っていた。教師

が入ってきて、それに引き続いてチャイムが鳴る。

そして今日も僕は時間を浪費する。



去年僕は、出席日数が足りないながらも全国模試でそこその点数を取っていた。勿論サボり魔の岡崎と春原は受けてないが、そのイマイチ模試事情を知らない二人ですら目玉が飛びでるくらいの点数をとったのだ。

つまり何が言いたいかというと、分かっている授業を聞くというのはとても退屈だということ伝えてたい。ましてや、去年のこの時期はまだ真面目に学校にきていた為、教師が変わっても同じ話をされるのはとても飽きる。

今年度になってからずっと、一応ペンを左手に持ちながらも、朝と同じように外を眺める。教師も僕が言い返すのを恐れてか、それともただ単にもう見捨てられているのか、僕に注意することはない。

そんな風にしてる内に、午前の時間はようやく終わりを迎えた。昼ごはんを食べるべく教室を出て行くクラスメートに紛れて、ポケットに2つ折りの財布を入れた僕も教室

を出る。

向かうは一階の資料室。そこには昔から付き合ひのある一つ下の娘（ただし同学年）が住み着いているのでは？と疑ってしまうくらい居る。いつも昼ご飯を作ってくれているので、僕は全く頭が上がらない。

資料室の前に着き適当にドアをノックする。

「開いてますよ」

彼女の柔らかい声で返事が帰ってきたので、失礼するよの一声もなしにドアを開けて資料室に入る。こんなに無遠慮な事をするのは彼女しかないからだ。ましてや、彼女の方からこうしてくれと言われた。

中に入ると有紀寧の後ろ姿が見える。やはり、制服にエプロンと言うのはどこかくすぐられる。栗色のロングヘアから一本飛び出しているアホ毛がピコピコと揺れている。

何も言わずに座ると、有紀寧も準備が終わったらしく飲み物を持って僕の向かいに座る。

「こんにちわ、青葉さん」

「今日もお世話になるよ」

トロンと少しタレ目な感じの目をニッコリさせ、先ほど入れていたアイスコーヒーを

差し出して来る。アイスコーヒーにはストローがさしてあり、アイスコーヒーの色からするに既にミルクなどが入れられているようだ。

「これってこの前僕があげたやつ？」

教科書を入れるかばんとは別の手提げから何かを取り出ししている有紀寧に尋ねる。有紀寧は手提げから弁当を2つ出すと、僕の質問に答える。

「そうですよ。お家で練習してきて、ようやく納得出来るように作りましたので」

「そんな。普通に入れてくれればそれだけでいいのに」

「それはいいけません。青葉先輩には美味しいものを飲んでいただきたいのですから」

そんなにキラキラした顔で言われると恥ずかしくてモノも言えない。悔しい。

有紀寧との付き合いはかれこれ5年近いものとなる。昔からこの街に住んでいた僕は、有紀寧の兄の和人と仲は良くなかったが交流を持っていた。

それからあれこれあって有紀寧に気にかけて生活を送るようになった。と言っても最近では、僕の方が気にかけてられ面倒を見られている気もする。

「どうかしましたか？」

弁当とスプーンを差し出して来た有紀寧は首を傾げ、上目遣いでこちらを見ていた。「有紀寧のことを少し考えていただけ」

有紀寧は顔を背けさらに強く弁当を差し出して来る。何か不味いこと言っちゃった

かな？

有紀寧から弁当とスプーンを受け取る。既に弁当の包みのリボン結びが外されていた。細かい所まで気が配られていて、有紀寧がいい奥さんになることは間違いない。

いや、あいつらがいる限り難しいかな……。

「いただきます」

二人声を合わせいただきますを言って、弁当を食べ始める。中身はオムライス、弁当のためケチャップライスの上に卵を乗せたものになるが。

ご丁寧なケチャップでハートが書かれています。気が恥ずかしさを覚えるが、せっかく作ってもらった上にそんなことをしては失礼なのでありがたくいただく。

スプーンを入れただけで卵がふわふわで、ご飯はベチャ付いてもいなく変にパラパラしていない事がわかる。一口大に取り口に運ぶ。

トマトの酸味と甘みが程よく合わさっていて美味しい。ケチャップライスには細かく切られた野菜が混じっていて、食感が単調にならなく食指が止まらない。



有紀寧のオムライスを食べながら雑談をする。廊下を歩いているとものを押し付け

る幽霊がいるとか、同学年にとても強い女子生徒がいるだとか。そんな話を有紀寧からされ話を広げていく。僕の方から話せることはないのです、これが僕らの基本形だ。

オムライスを食べ終え、アイスコーヒーを飲んでいたら校庭の方からバイクの重低音が鳴り響いた。

「何だ？」

「何でしょう？ わたしの知り合いにこんな事をする方はいませんし」

「だよな。ちよつと見てくるよ」

上着を有紀寧に預けて校庭の方に駆けていく。

校庭には時代錯誤なヤンキーが三人いた。僕や有紀寧の知り合いではないことが確認できたので、御三人方には退場してもらおうと校庭に入る。

すると、僕と同じタイミニングで入ってきた娘が一人。グレー髪に黒いカチューシャを付けている娘だった。

彼女は僕に気がつくところこちらに寄って来た。

「ここは危ないぞ。私がやるからお前は離れていろ」

もしかすると彼女が有紀寧の言っていた女子生徒だろうか。制服には僕と同じ赤色のワッペンが付けられているので、彼女は僕と同じ二年生だ。彼女も僕のワッペンを見ている。

「たとえ君が強いとしても、君一人に任せたら僕が弱いみたいじゃないか。僕が男の子であるために、それはなんとしても避けなくちゃならない」

「面白いなお前。名前は何て言う」

「伏見、そういう君は」

「お前があのお見か……？ いや、すまない。私は坂上智代だ」

なんて言つたつて僕は握手までしてゐるんだから。あまりしたくは無かつたのだが、求められたら流石にした。握手を終えると坂上は少し顔をしかめる。

「お前の噂は聞いているから別に構わないと思つたが。大丈夫なのか？」

「僕はこつちでやるからさ」

視線を脚に向ける。喧嘩はもつぱら脚を使ったほうが拳を使うよりもダメージを与えやすい。

「私と同じか」

「これは偶然だね。それで、どつちがどつちをやるか決めるかな。ジャンケン？ それともあみだくじ？」

「そんなことをしてる暇はないのではないか？」

「その男オオオオ!! 無視してんじやねエエよ!!」

煽りには成功つと。正当防衛を盾にして停学を防ぎたいがために坂上と不良の前で

コントまがいの事をした介があつた。坂上と握手をしたのは悪手だったが、握手だけにねって。

「売られた喧嘩は定価で買う24時間営業店ですので、坂上は残りの奴をお願い」
「わかつた」

瞬時のやり取りで意思疎通を終える。彼女とは友人としてではなく、戦友としてのほうが上手くやつていけそうな気がする。

「死ねエエエエ!!!」

以下にも頭の悪そうな言葉遣いをしながらバイクを僕に向けて走らせる。後ろでは鈍器を地面に当て、如何にもコレで殺してやると言つた顔をしている。

僕のやることは単純で、ただ跳躍跳んだした。

僕の膝は吸い込まれるように運転手の顔に打ち込まれる。

運転手は気を失つて倒れる。バイクも制御を失つて揺れる。後ろに乗っていた男が鈍器を振り下ろすが、バランス崩して空振り。

そこに僕のシユートが決まる。そこそこに威力を抑えているため、頭がボールのように飛んでいくことはない。いや、冗談なだけだね。

無事に悪漢を懲らしめることに成功した僕は目線を隣に向ける。戦闘中にちらつと坂上の方を見たが、心配する必要がないほど強かつた。なんで相手に空中でコンボを決

められるのだろう。

「中々やるな」

「そういう君こそ。僕が出てきたのが無粋だったみたいだ」

再び握手をして、それ以上言葉をかわさないで校舎へと歩みをすすめる。なんか力ツコイイ感じがする。

でも、その理由はただ話す内容がないからなんだけどね。



無事坂上と協力してやって来た他校生徒にお引き取りいただいた（強制）僕は、有紀寧に預けた上着を取りに資料室へと向かった。

その途中で、岡崎が今朝通学路の坂で見かけた女の子と花壇に座って話をしていた。アホ毛がつむじあたりから二本生えている。どっかで見た気がする。

それが誰なのか考えていると岡崎が僕に気がついたようで、こちらに手を振っている。友達に手を振られて行かないほど淡白ではないので花壇の方に歩く。

「よっー！」

「朝はよくも置いて行ってくれたな!!」

「ははは！ そのおかげでそんなに可愛い娘と仲良く出来たんだから、むしろ感謝してほしいな」

お遊びで軽く首が絞められる。

隣に座っていた娘は最初は驚き心配していたが、僕らがただじゃれあっているだけだと分かるのと表情も元に戻り、むしろ最初より柔らかいものになった。

岡崎は僕にこのまま続けても時間の無駄になると気づいたらしく首絞めが緩まる。

「こちらの娘は？」

「コイツは古河渚。クラスはB組だ」

「ど、どうも！ 古河渚です!!」

古河……。ああ秋生さんの一人娘か。あのアホ毛も遺伝したのかな。顔は早苗さん似だ。

「僕は伏見青葉。これからどんな付き合いになるのか分からないけど、一応よろしくね」
「そうだ古河。コイツもお前と同じだから、何かコツを聞けばいいんじゃないか？」

「そうでしたか。ワツペンの色が2年生のものなのにどうして岡崎さんと友達なのか、という疑問が晴れました」

はて。一体どこが古河さんと僕が同じなのだろうか。

秋生さんに好かれている点では同じなにする。しかし、それを岡崎が知っているわ

けでもないし。それなら、なんだろう？ 与えられたヒントはワツペンの色。

というか、僕には喧嘩が強い以外に特筆すべきことなんか一つしかないじゃないか。

「もしかして古河って一つ上？」

「は、はい」

ダブリ仲間ということね。

「それで、僕に聞きたいことって何かな？」

「ほら、古河」

「あの、伏見さんはどのようにお友達をつくりましたか？」

僕はどれくらい友達がいるだろう。まずは岡崎と春原。この二人とは同時期に何かしらの問題を起こして、誰かの手引によつて引き合わされた。けれどそれのお陰で僕はこうして仲良くバカをやっている。

あとは藤林姉妹。姉の方は岡崎と春原経由で絡まれた。基本僕は二人と違って問題児ではないので、二人と一緒に扱ひを受けて憤慨したことを覚えている。妹は去年同じクラスだった。

けれどそういうのじゃないだろう。なんたってダブった上での質問だ。今は先輩の友達のことを言っても意味がないはずだ。

「答えづらかったら大丈夫です」

あれこれ考えているうちに時間が経ったらしく、僕が言い出しづらいのではと古河が気を使ってくれた。

「ごめんごめん。残念ながら僕も2年生になってできた友達は一人しかいなくて」
「では！ その方とどのようにお友達になったのかを!!」

花壇から立ってグイグイ来る。

「さっきの喧嘩で仲良くなっただけで、参考になる？」

「それは参考に出來なさそうです……」

「お前とよくいる子はどうなんだ？」

「有紀寧のことだよ。彼女は昔馴染みで仲良くしてるから、コレもまた古河の参考にならなそうだし」

「むむむ。どうしましょう」

僕のようなあまり周りの人の事を気にしない人種なら友達の有無をそこまで気にしないが、古河の様な人なら気になるのだろうか。

「でも、もう一人出来てるでしょ？」

「「え？」」

僕の声に二人して反応する。しかもその言葉は一緒だった。

「二人はもう友達って言っつていいんじゃないかな。今朝有っただけならともかく、こう

やっってお昼を一緒に食べて、相談して解決しようとして。これだけじゃ足りない？」

僕の声に二人は顔を見合わせ「そうだ」と呟いたあと二人して笑った。もうすでに結構なとこまで仲良くなってるよね。

そんな二人を見ていると昼休みの終わりのチャイムが鳴った。有紀寧に上着を預けたままだったことを思い出し、二人に別れを告げ資料室から二年の教室へ繋がる廊下へ向かい有紀寧を探しに行く。

実際のところは有紀寧が資料室の前で僕を待っていたので、僕は少しばかり無駄なことをしただけに終わったのだけだね。



「いいか坊主。秋生は君たちとやる時は完璧にナメ腐っている」

「えー！ 兄ちゃんそれってホント？」

つまらない高校の授業を終えた僕は公園で、球児を目指す少年たちに野球を教えている。打席に立つ大人気ない打者に対して、可愛らしく怒っている少年にアドバイスをする。

「だからこの前教えた必殺技を使え」

「いいの？ 兄ちゃん」

「今まで誰にも見せてないんだろ？」

「うん！ 言われた通り隠れて練習してたから」

「ならOKだ！ ちゃんと捕ってやるから思いっきり投げろ」

「わかった!!」

置いていたグローブを取って、コーチからキャッチャーへと気持ちを変える。

「何を言いやがった」

「アンタの顔を驚きに染めるようなこと」

「けっ！ 相変わらず可愛くねえな」

バッターボックスに立つのは、今日の内二回も出会った古河渚の父親の古河秋生だ。タバコを啜え、バットを構える。

先ほどアドバイスした少年が球を投げる。

その速度は遅く、秋生はニヤリと笑う。

「おらあ!!」

威勢の良い声とともにバットを振るう。

その後に聞こえたのはバットを空振る音とボールがキャッチャーミットに収まる音だった。

「おう、どうした？」

「お前子供になんてもん教えてんだ」

「それは後々。あとツーストライク取ってからでも良いっしょ」

「二度とそんな口を叩けないようにしてやる」

そんなフラグを立てた秋生は見事に三振し、少年たちのリベンジは見事に達成された。

そんな感じで僕と秋生の露骨すぎる演技に騙された少年たちは、日が沈み始める頃に三々五々それぞれの家に帰って行った。

残された僕達年上二人は公園のベンチでだべっていた。

「今日も早苗さんのパンがうまい」

バリバリと普通パンの中として不似合いなせんべいが入ったせんべいパンを食べる。早苗さんのパンがこの時間に売れ残っているときは低下の半分で売ってくれるので、とても財布に優しい。

僕の発言に秋生はあり得ないものを見る目で僕の方を見てくる。

「前から馬鹿だと思ってたが、頭だけじゃなくて舌まで馬鹿だったか」

「今早苗さんがいなくて良かったですね」

「はっ！ また早苗を傷つけるところだった」

この商店街名物を見れるのでそれでもいいのだけれど。

「そういえば娘さんに会いましたよ。渚……さんでしたよね」

「遂に出会ったか！ けどお前高2だよな？ 何か接点あったのか？」

「無事進級できた友達が話をしていて、その流れで知りました」

「その友達は男か？」

血走った目で僕の方を掴んでくる。

怖いのでやめてください。

「ま、まあ」

「クソツ！ 俺の娘がどこの骨かしらないやつと話をするなんて」

「僕はいいんですか？」

「お前はアレだ、俺の野球仲間だから問題ない」

随分とセキュリティーが低いことで。そんなんでいいのか親馬鹿、改め馬鹿親よ。

「腕の方はどうだ？」

さっきまでのギャグ調の話は終わりを迎えたようで、秋生のトーンが下がっている。

「ここで僕が場を濁そうとしてテンションを上げて話をすれば、何気に優しい秋生は何事もなかったかのように別の話をするだろう。」

「利き手を移すことはもう完璧です。けど、完治は無理って言われました」
「そうか」

小さく一言だけ言つてタバコの煙を吐き出す。

秋生との付き合いは結構幼い頃からの物である。だからって事もあるが、秋生がもう一人の父親のように思える時がある。実際にこの人が父親だったら大変だろうけど。

「つと！ そろそろ客が来そうな心配がするから俺は店に戻るぜ。お前も夜になる前に家に帰れよ」

「分かつてる」

「可愛くねえな」

「男子高校生に可愛さなんか求めるなよ」

そりやそうだとガハガハ笑う秋生を尻目に僕は自分の手を見つめる。

彼との関係

朝早く学校に行くとは下駄箱で岡崎と春原が立ち塞がった。岡崎は申し訳なさそうにしているが、春原は何だかしたり顔でこつちを見ている。その姿ははつきり言つてうざすぎる。

絡まれると厄介なので無視して行こうとしたが失敗。下足ロッカーを開けようとする腕を春原の手が止める。

「遅いぞ伏見！」

「おはよーさん。岡崎も朝から大変だな。こんなアホに付き合わされるなんて」

「伏見もな」

春原の思いつきに巻き込まれるのはいつもの事だ。

今日はどんな思いつきに巻き込まれるか、それを考えるだけで気が滅入ってくる。早くこの場から離れなくては。

「んじや、僕はこれで」

「先輩のことを無視してるんじやないよ!!」

アンタこそ元同級生にそんなこと言つて悲しくならないのか？

腕を振って手を引き剥がそうとしても、一向に春原の手が離れる様子がない。いつても聞かないと思うので、ここは一発蹴りをお見舞いしてやろうか。

蹴る前のルーティーンとして右足のつま先で地面をコツコツとする。

「落ち着け春原！ 伏見がお前に蹴りを入れようとしてるぞ！ そんな事されたら、これからやる事に支障が出ちまう！」

「ちっ！ 助かって良かったな伏見」

僕は何を見せつけられているのだろう。漫才かな？ コントかな？

春原は岡崎の助言で僕から手を離す。結構強い力で掴まれていたから、少しだけ跡が残っている。

「それじゃ僕は教室に行くから」

春原の拘束から解除された為、出来るだけ早く離れる。自由になった腕でロッカーを開けて靴を履き替える。

向かうは教室ただそののみ。

「ちよちよちよ！ 待つてよ！」

一手目で離脱失敗を悟る。

渋々ながらも二人の近くに歩み寄る。

「それで結局どうしたの？ 早く教室に行って特段やりたい事があるわけじゃないけ

ど、君らといて変な噂が立つのは嫌なんだよ」

「そんなこと今更じやんか」

「それじゃ春原またね」

春原の態度に少しイラツとしてしまう。再び教室に向かうため体の向きを変える。

確かに今更なのは認める。しかしそれは、二人が僕を巻き込むからであつて、暴力沙汰以外は二人が原因である。言い換えれば、暴力沙汰は僕の方からなだけどさ。

「ほんつと待つてよ!!」

泣きそうな顔で春原が僕の体にしがみついて来る。僕よりも力が強いから、簡単に引き剥がすことが出来ない。なので脚でゲシゲシ蹴る。

口から息を漏らしながら少しずつ春原の腕の力が弱くなる。

「もう一回聞けどなんの用?」

「それはだな……何と僕はこれから「お前坂上智代と何か話してただろ? アイツとの仲を取り持つてもらいたいんだ」ちよつと岡崎! 僕の台詞取らないでくれる!!」

坂上になんの用があるのだろうか? ……いや、どうせくだらない理由だろう。女なのに強いのが気に入らない、なにか裏がある。こんなところかな。

「それで今回は何をしでかすんだ?」

「ふふふ。それは来てからのお楽しみだ」



「春原に道化役^{ビエロ}がびったりだと分かったけど、これを見せたかったの？」

春原に嫌々連れて来られた先で春原は坂上と対峙した。気持ちが高ぶっていたせいか、僕が春原を坂上に教える前に春原が自分で喧嘩を売りに行った。

僕がついてきた意味がないじゃないか。

因みに春原は、女子であんなに強いなんてあり得ない。ヤラセなんじゃないのか。と思ったそうだ。

そしてそのヤラセに僕も巻き込まれたとか。そんな心優しい傍迷惑な思い込みでここまで付き合わされた。

その後は春原が殴り掛かって坂上に文字通り死一蹴されたわけだ。しかし、あの蹴りはやはり魅入るものがある。僕の無骨なヤクザキックを止めて坂上に弟子入りしたい。冗談だけど。

ぶっ倒れる春原に岡崎と共に駆け寄る。

傷は深いが春原なら大丈夫だ。心臓が動いて、呼吸をしてるなら一安心である。

「伏見じゃないか！」

坂上は春原を介抱している僕に気が付き、声をかけてくる。僕としては昨日一緒に不良を退治しただけの僕に話しかけてきてくれることが嬉しい。昨日の昼に何故か隣りに居た一般生徒B位に思われてると思っていた。

しかしこのタイミングはあまりよろしくない。普通に廊下ですれ違うのが最高。次点が喧嘩している場所で会うこと。

「お、おはよう坂上。君も変なのに目をつけられちゃったね」

「ゴイツのことか……」

僕らの目線は廊下に突っ伏す春原に向けられる。既に意識が回復しはじめているよ
うで、岡崎による坂上講座を受けている。

そして僕は内心冷や汗。昨日の放課後に情報収集した限り、僕のやってきた事は彼女の何かしらの琴線に触れることは間違いない。

幸い『伏見』はこの学校に二人いるから、フルネームを言わなければ厄介なことになることはないだろう。

「ゴイツ……春原の執着心はゴキブリの様にしぶといよ。これからしばらくは付きま
わられることを覚悟したほうがいい」

「それは面倒だ。あまりこういう事はやりたくないのだが」

ふむふむ。坂上は好戦的ではないと。昨日や今日のことから推測するに、ヤラれたら

やる感じなのか。

「しかし、先輩に対して随分と仲が良さそうな物言いだな」

「仲がいいとかではないけど、気のおけない友だちであることは確か、かな。こんな感じに学年が変わっても付き合わせられるほどにね」

昨日古河にしたように僕のワツペンを見せる。続いて岡崎と春原のワツペンを指差す。

「ふむ。となるとお前が悪名高い伏見か」

坂上の発言から、僕の発言が迂闊だったことに気づく。そりやそうだ。ダブった伏見なんて一人しかいないよね。

「ははは。坂上は何を言っているのかな？ 僕は伏見じゃなくて武式^{ぶしき}。音が似てるから間違えたのかもよ」

自分で苦しいと分かっているが、仕方がない。僕のうっかりでこうなってしまったのだから、ここは騙されてもらうしかない。

「嘘をつくな伏見青葉。俺と春原で去年はやりたい放題やった癖に」

「私に嘘をついたのか!？」

岡崎のやつ！ 僕が君に何かしたか？ ……してましたね。心当たりがありません。

だがしかし、今は岡崎に愚痴を言う暇はない。坂上に対してついたくだらない嘘のツケをどうにかしなくてはならない。

「昨日一緒に不良を退治したからお前が『悪名高い伏見』ではないと信じたかったが、お前がそうだったとはな」

ガシつと腕を掴まれる。ちよつと君力強くありませんこと？ 全く腕の拘束を解

除できないまま、僕は坂上に引き摺られていく。

ちよつとニヤリと笑う岡崎と、ボロボロの癖に大笑いしている春原にとてつもない程怒り覚えた。



連れて来られたのは僕が所属する教室だった。坂上も同じクラスだそうだ。どうしてこれまで気づかなかつたのだろうか。教室に着くと坂上は自分の机にかばんを置く。ちなみに、ここに来るまでの途中で有紀寧とすれ違った。有紀寧なら助けてくれると思ひ、視線で助けを求めた。しかしその結果は頬を少し膨らませてそっぽ向かれてしまい、作戦は失敗。そして現状に至る。

「クラスはどこだ？」

「はい」

「……お前と同じクラスだったとはな」

「そうだったみたいだね。坂上も僕みたいなのに関わると折角の評価が悪くなっちゃうよ。」

「私は気にしないから安心しろ」

「ここまで押しが強いと何も言えない。」

僕の席がどこか聞かれてそれを伝えるとそこまで連れて行かれ、席に座らせられる。

「それで君は僕に何を言うつもりなのかな？」

「みんながお前に迷惑していると聞いた。だから私が叱つてやる」

優しいやつだな。

なんて言つて、感涙を流すほど僕は素直じゃない。

坂上の行為自体には目を見張るところがあるが、教室の隅や教室の外にいる生徒数名がくすくす笑っているのがその気持ちを薄れさせる。

「君はどんな事を聞いたのかな？　そういうのつて本人が無自覚のうちにしていることが多いでしょ。だから教えて欲しいな」

「いろいろ言われたが、最も多いのは授業を聞いてほしいというものだ。お前が一人ペンも持たずに授業を受けるだけで、周りの人のやる気が下がるそうだ」

中弛みの理由付けとダブった不良野郎を陥れる所としては妥当な所かな。でも、そう言うのは面と向かっていって欲しい。

それは当人だから言えることで、他の人からしたら僕は人の革を被った悪魔や鬼に見えるのかもしれない。

「確かにそれは申し訳ないと思ってるよ」

嘘だけ。

これでも頑張ってるんだ、これくらい許して欲しいという本音。でも、認められないと思う。

「でも、僕にもそれなりの理由があるんだ。他の人ならともかく、君なら察してくれると思ってるんだけど」

ここで目の前に立っている坂上の左手を掴む。

昨日と同じように坂上が顔をしかめる。大体のことは理解、と言うより再認識してもらったのかな。

「そこまでなのか？」

「言っちゃえばね」

「しかしどうしてそれを言わない？」

「自業自得なんだ。そんな事を言っても、悲劇の主人公を演じている様にしか思われな

いよ」

掴んでいた手を離す。

掴んだ時から彼女のファンらしき娘がギラギラ視線をこちらに向けていた。その中の数人に坂上にお願した人がいたので、更に僕に対するヘイトが溜まっただろう。

「そして君に一つ。年上の僕からおせっかいね」

男子としては背が低いけど、坂上の背より高いから耳元には囁く事ができる。

「物事には理由つてのが必ずと言っていいほど憑き纏う。呪いと言っていいほど必ずね。そして物事の結果と共に理由にも大きな割合を置いている人も多い。

君は素直だ。人を信じる綺麗な心を持っている。それは美点だ。僕ですら羨ましいと思うほどだ。

でも、それじゃあこの世界は生き難いだろう。

何が言いたいかというと、物事の表面だけじゃなくて裏面や中身を見ることも大切になるんだよ」

そう言い残して僕は教室を去っていく。キザ過ぎて自分でも気持ち悪すぎる。

それでは、さよなら無遅刻無欠席。来年は会えることを祈ってるから。

なんて坂上に言ったが、僕も僕で何を言ってるんだと恥ずかしくなってしまう。若気の至りと言っていいのか分からない。

でもまあ。2歳上からの忠告ということになるので、それなりに聞いてもらえるのではないか。裏でコソコソ企んでる奴のために使い潰されるような人ではないと、僕は期待しているのだから。



このまま人がいない家に帰ろうと思ったが、有紀寧が自分の為に弁当を作って来ていることを思い出す。このまま帰っては昼ご飯を作ってきてくれた有紀寧に申し訳ないので、校内で時間を潰すとする。図書館はそこに住み着いてる人がいるらしいので、資料室が開いていることを祈りながら、先生に見つからないようにして資料室まで向かう。

運良く資料室は資料室の鍵は開いていて、周りに人がいないことを確認してから中に入る。

「どなたですか?」

無人と思われた資料室で声がしたことに驚く。しかしこの声はこの主の声で、今の僕の心に深く染みる。

「僕だよ」

「やはりそうでしたか。今飲み物をお出ししますね」

「ああ、頼むよ」

有紀寧はさも当然のようにコーヒーをコップに入れ、座った僕の前に差し出す。

この状況はあまりにもおかしすぎる。もしかして隠れながら移動している中で、お昼になってしまったのだろうか。

なんておかしなことは無く、時計を見ても一限から数分経った時間を指していた。

「隣のクラスの奴が教室を飛び出した」

「えっ?」

「そのようなことをクラスの方が言っていたので、もしかと思つて。なんて思つて先回りして来ちゃいました」

少し舌を出しながら有紀寧は言つた。

「授業は?」

「青葉さんと一緒にさぼりです」

どうしてこの子はサボりをこんな可愛く言うのだろうか。

彼女に偽りは無いようで椅子に座り、かばんからおまじないの本を取り出す。その椅子はいつもの向かい側の椅子ではなく、僕の右隣の椅子であることに疑問を覚える。

「ダメだよ。君は僕に付き合う義理は無いんだし」

「義理とかじゃなく、私が青葉さんと一緒にいたいからサボるんです」

椅子を移動させ僕の右肩に身体を預けてくる。

予想外のことの連続で僕の心臓は鼓動を早める。

いつもは可愛い後輩としてしか見てなかったのに、距離が近くなると異性として意識してしまう。

有紀寧は何も変わらず占いの本に視線が行っている。

「なんて冗談です」

「えっ?」

「少し青葉さんを驚かせようと思って、あんなこと言っちゃいました」

目線を上に向けた有紀寧の顔はイタズラが成功した子供ののように、ニッコリとしていた。タレ目の童顔さもあってか、先程までの異性として意識していた気持ちはどこかへ行った。

「でも一緒にいますよ。嘘をついたのは理由だけです」

「どうしても?」

「はい。本当は青葉さんに会って、ここに先生方が入れないように鍵をしてから、私は授業に戻るつもりだったんです。でもあなたのその顔色を見たら、私……」

差し出された鏡を覗くと、青白い顔が写っていた。

これは酷い。足元が覚束無いから体調が悪いとは思っていたが、顔色にまで出ているとは思ってなかった。

「まだあのことを言うのと辛いですか？」

「まあね。これは中々慣れないね」

僕の右手に腕を回し、両手で僕の右手に触れる。女の子らしい柔らかい手だ。

「最近聞かれることが多くてね。それもあつたのかな」

昨日と今日の坂上への説明。

昨日の夕方の秋生との会話の中。

僕の握られた右手を有紀寧は簡単に解いていく。

握る力を強めて抵抗しても、ものの簡単にすべての指が解かれ、有紀寧の左手が当てられる。そして、優しく握られる。

「でも、私はそのお陰で青葉さんと手をつなげます」

その有紀寧の優しい言葉に自然と僕の目から涙がこぼれた。



後輩に涙を見せるといふ、二度としないと決めた事の四度目くらいをした後は、教師

が資料室の前を通るときに気をつけながら二人で話をしている経過した。

気が付いたら全ての授業終了のチャイムが鳴ってから一時間ほど経過していた。

「ごめんね。本当にここまで付き合ってもらっちゃって」

「気にしないで下さい。私も私で青葉さんが聞き上手だったので、沢山話してしまいましたし」

玄関までの途中、一年生の教室を通った時、一人の生徒がポツリと教室にいた。その光景に目が釘付けになってしまった。

一年生の教室にいるから、という理由で断言は出来ないがきつと彼女は一年生だろう。何をすることもなく、席について何かしらの形をしている木片を見ていた。

「どうかしましたか?」

「ちよつとあの子見てくる」

「青葉さん!」

僕の体は意識とは関係なしに動いていた。

その女の子に近づくと手に持っている木片がヒトデの形をしているのに気が付く。それと同時に彼女の手がボロボロとなっていること分かる。

急に動いた僕の後を有紀寧が歩いてくる。

「どうしたんですか?」

「手を怪我している。絆創膏は貼ってるけど剥げそうだ。保健室で薬箱を貰ってきてもらってもいいかな？」

「分かりました」

有紀寧が薬箱を取りに行ってる間に僕は目の前の子とのコンタクトを図る。

机の正面に行き、最初に顔を拝見。

少女Aの顔はともも童顔で、なおかつ何処かにトリップしているように幸せそうな顔をしている。ついでに、ワツペンの色から一年であることを確認。

「どうして君はヒトデを見て幸せそうな顔をしてるんだ？」

「あなた風子が言っていないのにコレがヒトデだと認識しました！もしかして風子の兄ですか!？」

どんな理論だそれは。

そして、あんなトリップしている状態でも僕がいた事を認識していたことに驚く。

「つ！あなた誰ですか!？」

前言撤回。分かってなかったのか。

「僕は伏見、善良な高校2年生だよ。そういう君は？」

「伊吹風子です」

「何をしてたのかな？」

顔だけでなく喋り方や雰囲気までも実年齢より幼い感じなので、女兒に話しかけるようになってしまった。だが、伊吹は気にしていないようだった。

少し言うか言わないか躊躇ったあと（躊躇いの過程は顔や行動に出ていた）僕に教えてくれた。

「ヒトデを彫っていたら変な人に変なことをされて、彫刻刀を奪われてしまったのです」
変な人に変な事って、事件じゃないか。学校の中なのでその変な人が生徒である可能性は高いし、伊吹の手を見て彫刻刀を没収したのは立派な行動だと思う。

「しかしそこで風子は諦めませんでした！ 既に作ってあったヒトデたちを見て、彫刻刀が帰ってきたら何をするかを考えてたのです!!」

椅子から立ち腰に手を当てドヤ顔をする。

「それでそれで？」

「恥ずかしながら、風子の自慢のヒトデたちに惚れ惚れしてしまいました!!」
元気があつて大変よろしい。

話にオチがついた所に、タイミングよく有紀寧が戻って来た。

「お待たせしました！」

「ありがとうございます」

有紀寧の言葉の後に、がっとな腰に衝撃があつた。

何かと思つて見てみると、伊吹が腰に抱きついていた。顔をグリグリと僕に押し付けている。

「おにいちゃん！ この人だれですか!？」

「はじめまして、宮沢有紀寧です。私も青葉さんの妹です」

いつから伊吹は僕の妹になったんだ。まだ出会って数分しか経っていないだろう。そしてさっきのは冗談じゃなかったのね。

そして、有紀寧はむしろコチラからお願いしたい。

「あなたと風子は妹仲間です!」

「仲間です!」

二人それぞれ独特の空気を持っているのだが、どうやらそれがマッチしたようだ。この二人の世界が創りだされたら僕はついていけないだろう。

「挨拶はそれまでとして、ほれ風子。座って」

「どうしてですか?」

「伊吹さんは手が痛くないのですか?」

「い、痛くありません!」

強がって嘘をつく伊吹の手を、有紀寧は珍しく小悪魔な笑みを浮かべて触る。

「痛つ……くない! はずがないじゃないですか!？」

「やっぱり痛いんですね。青葉さんお願いします」

怪我人の扱い方を分かっているというか、そっちの方向に慣れてしまったのか。そんな事を考えながら僕は伊吹の手の手当を始める。

日頃から野球少年たちの怪我を手当してあげてるので、これくらいはお手の物だ。消毒の時にしみて痛いかな、と思つたが有紀寧と話していたためか、大きなリアクションは無かつた。

「これで終わりつと」

「伊吹さん、痛くないですか？」

「はい！ 元氣です！」

使つた道具を救急箱に戻す。

「お星様を彫るのもいいですが、手には気をつけなければいけませんよ？ こんなに可愛らしい手をしているのですから」

「お星様ではありません！ ヒトデです！ しかし有紀寧さんの意見は参考にします。風子の相棒も攫われてしまいましたし」

「その攫われた相棒が戻つて、また怪我をしたら資料室においでよ。あそこなら保健室には劣るけど、そこそこ手当に使えるものがあるからさ」

「はい！ 怪我をしたら行きます！」

伊吹に別れを告げて、保健室に救急箱を返して、再び有紀寧と一緒に帰路に着いた。

僕と君と貴女とそして……

「暑い」

半ドンを終えた次の日。カーテンを閉じないまま寝落ちした僕の顔に、太陽の光がさ
んさんと降り注いで目が覚める。変な体勢で寝たため少し痛む体をほぐすべく、肩を回
す。バキバキと心地の良い音がする。

「よし」

カーテンをそのままに窓を開け、風を室内に取り込む。生ぬるい風が入ってくる。そ
れもそのはずで、時間は既に十時くらいになっている。どうしてこんな時間まで日の光
で起きなかったのかと自分でも疑問に思う。

台所に行つて食パンをトースターに入れタイマーをセットする。それから冷蔵庫の
中を見て、中身の無さに顔を顰める。卵と薄切りのベーコンを取り出す。ベーコンを先
に敷いた後で、卵を割って上に乗せる。それから普目玉焼きを作る要領で焼いてい
く。

出来たベーコンエッグを焼き上がったトーストの上に乗せ、口に運ぶ。普通だ。やは
り一人で食べる飯は旨くもなければ不味くもない。

ちやちやと片付けをして時間を持て余す。勉強と少年野球の観戦以外に興味がない僕にとつては、この日曜日は暇すぎてしょうがない。昨日寝落ちして読み切れなかった本に目を通すが、目が滑って頭に内容が入ってこない。

仕方ないかと呟き、寝間着を脱いで外出するような格好に着替える。特段オシャレなわけでもなく、無難に黒のスキニーパンツに同色のTシャツを着て薄手の淡い色のカーディガンを羽織る。

「行つてきます」

◆ 誰も居ない部屋の中に僕の声が寂しく響いた。

日曜日ということもあって、街は一週間の中で一番の賑わいを見せている。何処を見渡しても幸せそうな笑顔が目に入る。一方僕はと言えば、何も考えずぼーっと道を歩くだけ。特段行きたいところも無いのに、外に出たからには何処かに行かなくては。

そうして辿り着いたのは古河パン。日曜日なので平日のように混んでいないだろうと予想して店のドアを開く。

「どうもおはようございます」

お店の中はもぬけの殻で、ただパンだけが並べられていた。ちなみに、今日の早苗パ

ンもなかなか癖が強い。今日も売れ残りそうだから、夕方にもた寄りうかな。

殆どの人が早苗パンは地雷だなんだと言っているが、そこまでのものだろうか。確かに手放しに旨い、なんて言えるほど素晴らしいと思う。

挨拶から数十秒経って家の方からパタパタと足音が聞こえてきた。これは秋生じゃなくて早苗さんのものだな。

「いらっしやいませ。……あら伏見さん！」

「お久しぶりで早苗さん」

「ついこの間会ったばかりですけどね」

お店で立ち話もなんだから、と店の奥の自宅の居間に案内される。居間まで案内されると早苗さんは奥の台所で何かをし、どこかへ行った。

何だったのだろうかとうと居間を見ると、そこには煙草をふかしている秋生がいた。パン屋の店番はいいのか？

「お邪魔しまーす」

「邪魔するなら帰れ」

「ははは！ そんなに歓迎してくれるなんて思ってもいませんでした」

なんてテンプレなやり取りをして、それがジョークと分かっているのに気にせず座る。どこかから戻って来た早苗さんからお茶を受け取る。早苗さんも座り、三人でテ-

ブルを囲む。

「それで。今日はどうしてウチに来た？」

「何もすることがなかったので遊びに来ちゃいました。それと、古河……渚さんの友達をつくらう作戦がどんな感じのかなつと」

「あら？ 伏見さんは渚と知り合いなのですか？」

聞かれるのはそこなのか？ 秋生には言ったからてつきり早苗さんに伝わっていると思つてたんだけど、そんなことは無かつたようだ。

そこら辺はどうなのかと尋ねるように秋生に目を向ける。

「デメエ！ ウチの愛娘と知り合いなのか!？」

僕が前に言ったことを忘れてやがったな。

たしかにその後少しシリアスな雰囲気醸し出して話をしていたが、親バカのアンタがそれでいいのか？

「秋生には前に言つたけど、僕の友達が知り合いになつたみたいでソイツ経由で僕も」

「言われりやそんな気もするな」

本当に忘れてたのか。

僕の言葉に何か気になる所があつたのか、早苗さんが訊いてくる。

「もしかして伏見さんの言つたお知り合いとは岡崎さんですか？」

「そうですけど」

「やはりそうでしたか！」

話を聞くと古河が岡崎を食卓に連れてきたそうだ。

不良の岡崎も丸くなるようになったもんだ、と不意にも涙が溢れることは無かった。

「そういうえば、渚さんは？」

こんなに明るい家庭なら自室にいるより居間で話をしての方が楽しいので、わざわざ自室にいるようなことはないと思う。

となると外に出かけてるのか？

「アイツは体調崩して寝てる。お前には言ったがアイツ体弱いからよ」

マジですか……。タイミング悪いとしか言いようが無い。僕がこつち来てすぐに早苗さんが何処かに行つたのは古河の部屋だったのかもしれない。

申し訳ないからお暇する旨を伝えようとしたタイミングでパン屋に客が来たみたいで、秋生さんがお店の方に行つてしまった。

「渚も眠っていますし、変に気を使わなくて良いですよ」

過去に早苗さんにお世話になった僕は早苗さんに強く出れない。そのニコニコした表情が眩しすぎて直視できない。

「本当に良いんですか？」

「他人行儀ですよ。私が先生で伏見さんは生徒ですから、もう少し砕けた喋り方でいいんです。私にも秋生さんみたいな口調で喋ってくださいっても」

流星にそれはね。僕と秋生は……まあ、色々あったからあん感じの喋り方になってるわけであつて。それを早苗さんに対してやるとするのは心臓に悪すぎる。

「あはは。それはこれから頑張りますね」

「ふふふ、では楽しみにしてますね」

秋生がいる前でそんなことしたら、血祭りなることは容易に想像できる。その血はきつと周りにいた人（古川ファミリーを除く）のものだと思うけれど。

「去年はうちに来る回数も少なかったですし、今年は期待できるのかしら」

「そ、それも頑張ります……」

「これからは沢山来てください」

どうやって早苗さんのお願いを叶えようかと頭の中で考える。早苗さんの前だと素になつてしまふと言うか、嘘をつけない感じになつてしまふ。

それを言うなら古川もそんな感じがする。まあ、でもそれは僕じゃなくて岡崎に対してって感じだけだね。



「おーい青葉！ お前さんの知り合いが来たぞ」

早苗さんが何回か古河の様子を見に行きながら、僕がお世話になって以降の話をした。より具体的には1年生の秋から2年生の春にかけてお世話になってから、諸々の事情で学校をサボった事の『諸々』の部分について話をした。

こんなことを話すのは、話せるのは早苗さんと有紀寧くらいだ。このことを知ってるのも二人だけだ。

「誰ですかね？」

「行ってみましようか」

コップを台所のシンクに入れて、再びパン屋の方に移動する。話を終えて既に店の外にいますと思ったのだが、まだパン屋の中で話を続けている。

「知り合いって誰ですか？ ……って岡崎じゃん」

「あら岡崎さん！ 渚のお見舞に来てくださったのですか？」

いたのは岡崎だった。

古河が体調を崩したと聞いてやってきたのだろうか。そうだとしたら、岡崎は古河に入れこんでいるというか何というか。変わったな、というのが僕の感想。

「寝込んでるって聞いたけど」

「いえ、微熱なんです。……ただ」

早苗さんは2階へと続く階段を見る。

先程も階段を登りする音がしていたから、2階に古河の自室があるのだろう。

「渚は元々体が弱いんです。去年は長いこと学校を休んでしまつて。だから念の為に今日は寝てるようにしてお医者様が」

「何にせよお前が運んでくれたお陰で大事にならずに済んだ。ありがとうよ」

「いや、悪いの俺だから」

「おい青葉！ コイツを連れて何処か行け。コレをやるからよ」

スニーカーに履き替えた僕に岡崎が何かを話したそうに視線を向けるが、秋生が間に入つて来てそれは叶わなかった。

どうせコレから話せる機会は沢山から今は我慢しとけ。

「いいってー！」

「良いから持つてけ感謝の印だ」

「だからそんなつもりじゃ」

「どうせ売れ残るに決まつてるんだし」

秋生アウト。

隣にいる早苗さんに目を遣ると目に涙を溜めて裾を掴んでいる。

「私のパンは……私のパンは、古河パンのお荷物だったんですね!!」

早苗さんはサンダルのままお店の外に出て行ってしまった。

「俺は大好きだー!!!」

早苗さんに続いて秋生も飛び出す。

残されるこの店とは部外者の僕と岡崎。

「どうするんだこれ？」

「あはは。いつもの事だから、帰ってくるまで店番でもしようか」



「こつち来い！」

嗚呼これは何かの罰なのだろうか。やっぱり、岡崎を残して古河パンから抜け出したのが行けなかったのだろうか。あそこに居たら何か嫌な事がありそうな気がしたから抜け出したんだが、現に今嫌な目にあってるんだけど。

「たらたら歩くな」

散歩をしていたらガラの悪い奴らに路地裏に連れて行かれた。スプレー缶で落書きされたコンクリートの壁に体を押し付けられる。

相手の数は3人。柄の悪さと高校生に見えないが社会人としては若いため、どこのグ

ループのやつか想像は容易い。

「俺らこれから遊ぶ予定なんだけど金ないんだよね。だから金貸してくんない?」

「いいだろ?」

「てかコイツ、どつかで見た事あるな」

ニヤニヤと笑った口元から溢れる下卑た声。自分らが優位に立っているという自信から来るもの、と言うよりは何処かのグループに入って力を手に入れたから、という感じだろう。新入りの育成ぐらいちゃんとしとけよ。

コイツ等が喧嘩を売って怪我なんかしたら、アイツが悲しんでしまうだろ。

こちらとて、ただやられる訳がない。こちらも煽るように唇を三日月状に歪め、興味なさ気に顔を向ける。

「舐めてんのか?」

「さあて。何のことかねえ?」

正当防衛を盾にボコしてやろうなんて思っていたら、予想以上に煽った感じになってしまった。だってほら、目の前の奴なんてピキピキ聞こえるくらい血管浮き出ちやつてるし。

どうしよう。

「ふざけんなよテメエ」

「齒ア食いしばれよ！」

僕から左側の奴が右フックを放つのが見て取れる。僕の体を抑えつけてる奴を脚で押し、そのまま腕で押し倒して右フックを躲す。そのまま鳩尾に膝を食い込ませる。苦痛の音が漏れている。まずは一人。

立ち上がり、肩を回しコチラは喧嘩する気満々だという事を見せつける。さつきまで強気でいたのに、仲間が一人倒され少しビビっている。

先程殴ってきた奴を睨むとソイツは少し後ろに下がる。

「覚悟しろよ」

声を低めて威圧した後、人の多い大通りの方へと駆けて行く。流石に三人の相手をして勝てるなんて、よっぽどコンディションが良くなきや無理だ。それに、この先で僕らを見ている人がいるからだ。

正当防衛での誤魔化しが出来なくなるのは辛かった。それに、変に正義感があつて来られても困る。ソイツの隣を通り過ぎると一緒に、手引いて一緒に逃げる。

手を握っていない右側から後ろを見て、アイツ等が来ていないことに一安心する。でも、チラッと視界の端に写った銀色の髪は何かの間違いだと思いたい。

◆
「じゃ、僕はこれで」

「ちよつと待て」

なんで今日は上手く行かないのか。厄日なのか？

現実を見る覚悟を決める、前に

僕の視界に映り込む様に坂上が移動した。ここ数日、会いたくないランキングトップを独占している坂上と会うとか運が悪すぎるだろう。

漏れそうになる溜息を飲み込んで、きちんと坂上を視界に捉える。私服でも変わらずその大人びた、凜とした雰囲気纏っている。近づきたい感じなんだよね。

それに引き換えこっちは、知り合いとすれ違つても話しかけられない事を前提とした着こなしなので、無難中の無難であつた。

「何かな？」

「この前言われた事を私なりに考えてみたんだ」

「この前？……あの時か」

僕が歳下に説教された時の事か。何って彼女に言ったかな。そこあたりの記憶がふわふわしていて、思い出せない。

考えていると、両手で頬を挟まれる。

「なんのつもりだ」

「さつきから表情が硬いぞ」

「うるひゃい」

「顔は整っているのだからそんな顔をしているのは勿体無いぞ。笑顔とまでは言わないが、明らかにつまらなそうな顔はやめろ」

「それって、何か君に関係するのかな？」

「どうして私がお前についてあれこれ言われたか考えた結果だ。お前から取っ付きにくさを無くせば、いいと思った」

「確に理由を考えると言っていたのを思い出す。だからってこんな結果になるなんて思ってもいなかった。」

「ってか、挟む力を弱める位なら早く手を放して欲しい。」

「早く帰りたいんだが」

「つまり、私がお前をみんなに馴染むようにする。そうすれば誰もお前のことを邪魔だとは思わない」

「それだと、君が他の奴らに勘違いされて要らない悪評を貰うことになる」

「気にしない」

「言っても言っても埒が明かない。これだから意志の強い人、特に女性は苦手なんだ。」

「はあ。好きにしろ」

「分かった！」

こうして折れるのはいつも僕の方だ。

今まで我慢していた溜息がついに漏れてしまった。